

徳富蘇峰著『近世日本国民史』 にみる織田信長と豊臣秀吉

吉 田 曠 二

はじめに

徳富蘇峰は今の日本では残念ながら忘れられた歴史家である。しかし歴史家としての蘇峰の業績は大きく、『史記』¹⁾を著した中国の司馬遷、西洋では『ローマ帝国興亡史』²⁾を著した英国のギボンにも匹敵する堂々たる存在感を見せている。蘇峰は57歳から90歳まで、34年の長き年月を費やして、そのライフ・ワーク『近世日本国民史』全100冊を脱稿した。その第1巻は信長からはじまり、信長時代が3巻、それに続いて秀吉の桃山時代が全7巻の冊数になっている。57歳から60歳にかけて蘇峰は全力を集中し、まずは織田信長時代と豊臣秀吉時代を全10巻にまとめ挙げた³⁾。通常の歴史家ならば、この最初の10巻だけでも、立派なライフ・ワークである。しかし蘇峰は60歳以降晩年の90歳迄、さらに90巻を書き足して念願の大著『近世日本国民史』を完成した。最終巻になる100冊目を脱稿した蘇峰は感無量で秘書の顔前で嬉し涙を流している。この作品はギネス・ブックに登録されてしかるべきものであろう。だがこのシリーズは今の日本の読書界では、知る人ぞ知るという具合で、著者の名前さえもほぼ完全に忘れられ、新島襄の一番弟子でありながら、蘇峰が新島の平民主義思想の継承者であったことすら、日本の多くの歴史学者の間では無視されているように思われる。

その理由の第一は、蘇峰が戦後、GHQから戦犯容疑者に指名されて、一切の公職から追放されて晩年を過ごしたこと、第二はその戦犯容疑者としてのレッテルは戦後71年が過ぎ去っても、今なお、はがされない状況にあること、第三は戦後日本の大学の歴史教育の形骸化に原因があるように思われ

る。戦後、日本ではマッカーサー司令部の文教政策で、米国流のデモクラシー自由主義の影響下にある米国流の民主主義支持者と、1950年に勃発した朝鮮戦争前後の一時期、日本にも台頭したマルクス主義者とが、各大学のキャンパス内の象牙の塔の密室のなかで、その両派の研究者が対抗しながらも、蘇峰を排斥したことが原因であったように思われる。蘇峰は当時のマルクス主義者からは、皇室中心主義の右翼反動派のレッテルを貼られ、米国流の民主主義者からは、反米の帝国主義者として単純に排斥された。確かに戦前、戦中期の蘇峰はジャーナリストとしてみれば、その言論活動は、表面的にはその指摘が的を射たものといえよう。

蘇峰が描いた『近世日本国民史』では常に国家権力と人民の関係が対立関係において捉えられている。これは恩師新島流の平民主義を継承した愛弟子蘇峰の基本姿勢であった、と筆者は考える。

この原稿は2016年8月6日、新島襄一日研究会（主催：同志社社史資料センター第1部門研究・於明德館M2）で報告した筆者の講演メモを基本に筆者が十分に紹介できなかった説明を含め本誌で再現する。まず蘇峰が忘れられた歴史家である点を配慮して、最初に歴史家徳富蘇峰が誕生するまでの蘇峰の人物像を簡単に紹介し、『近世日本国民史』の構成とフレーム・ワークを説明してから、信長・秀吉時代の英雄の人物像と特色を紹介する。長文に渡る引用文や説明もここでは可能な限り削除することなく再現することにしたい。

1. 徳富蘇峰と『近世日本国民史』の構成

徳富蘇峰の『自叙伝』⁴⁾を紐解けば、少年時代の蘇峰が明治9年に熊本から上洛して、新島襄が京都に開校した同志社英学校に入学したころの自画像が描かれている。米国帰りのクリスチャン新島は、学生の人格を尊重する自由主義、平民主義教育の実践者であった。新島は安中藩の武士の出身であったが、米国から帰国後、京都に戸籍を移すことで、平民の身分になっていた。彼は洛陽の一平民になってもよいから、戸籍を京都に移して欲しいと郷里安中の父親に懇願したほどであった。蘇峰はそのような平民主義の教育者

新島襄に心を寄せたのである。

もう一つ、蘇峰が関心を寄せている人物が、明治10(1877)年、西南戦争が勃発したときの、反乱軍の指導者、西郷隆盛である。蘇峰は同志社英学校でも毎日、新聞の閲覧室で西南戦争のニュースをむさぼるように読んでいた。そして明治10年2月5日には、京阪間の鉄道開通式に上洛した明治天皇を熊本バンドの金森通倫につれられて拝顔し、キリスト教主義の専門学校に在学しながらも、日本国と天皇の存在に注目しはじめていた。自叙伝では、少年時代の自分が同志社で学び得たものは、国民的精神であり、それは外人宣教師の横暴な振る舞いへの反撥となり「同志社に入りて初めて我が日本帝国の難有(ありがたさ)さを知ったような気がする」⁵⁾と語っている。

筆者は少年時代の蘇峰のこの精神的自覚が後年の『近世日本国民史』執筆の原動力になったものと考えている。それは老境に達した蘇峰が「国民史をめぐる憶い出」で語った、次の言葉に結びつく。

蘇峰いわく「老生が維新史を書かんと思ひ立ったことは、10歳から20歳までの間であって、はっきりしたことは言はれぬが、明治10年、15歳の少年として、京都同志社に学びたる頃である。恐らくは明治10年の戦争が大いなる刺激を与へたものであろう」⁶⁾。

蘇峰は明治維新の英雄西郷隆盛にゾッコン惚れ込んでいた。その西郷が推進した明治維新史を書きたい、その思いが15歳の春を京都で迎えた蘇峰(当時は猪一郎)の夢となりその生涯の最終目標にしたことになる。しかし蘇峰の明治維新史は若き日の情熱だけで着手できるものではなかった。同志社中退後、彼は最初、郷里熊本で元侍の師弟を教育する大江義塾を開校し、その後は新聞記者として東京で活動しながら、一方で、その初心を忘れずに、歴史家としての力量を蓄積し、50歳の峠を越えてから、いよいよ明治維新史の著述に着手したのである。その前に蘇峰は自ら創刊した「国民新聞」を他人に売却し、一時は死に馬の身分になったが、『近世日本国民史』最初の10巻は彼の歴史家としての筆名をアルプスの高峰に押し上げるに充分だった。大正末期から昭和の初めの日本では、まだ蘇峰の文章を読み取り、十分に理解できる大勢の読書人がいて、『近世日本国民史』の刊行が待望されていた。その草稿は最初、「国民新聞」に連載されたが、同紙の経営

が圧迫され、経営権と編集権が主筆兼社長の蘇峰の手から離れると、大阪毎日新聞と東京日日新聞に蘇峰は招かれ、その『近世日本国民史』の連載もこの二つの新聞紙面に移して掲載された。その前に、彼は「民友社」から単行本として大正7年12月からそのシリーズ原稿を50巻にまとめて刊行していた。

蘇峰の明治維新史は冒頭で尾張名古屋の武将織田信長を登場させ、その志の継承者たる豊臣秀吉には、全6冊の分量を用いる程の力の入れようであった。なぜ、蘇峰は明治維新史の源流に信長とその弟子、豊臣秀吉の人物像を描いたのか？

蘇峰の『近世日本国民史』の魅力はその舞台上に登場する人物、英雄たちの躍動感あふれる人間像にある。蘇峰は信長を大航海時代の歴史を背景にして、信長が開国日本を導きだした最初の英雄として自分の作品に登場させ、同時に信長が尊皇論者でありながら、封建的な門閥と身分にこだわらない平民主義の武将であったとし、その後継者として秀吉もまた、若き武将として平民主義の推進者であったことに注目している。16世紀、大航海時代の世界的な潮流に乗って、近世日本の開国は織田信長からはじまった。これが蘇峰のライフ・ワーク『近世日本国民史』第1巻の最初のキーワードとなった。

信長時代の特色は16世紀、コロンブスの大航海時代の波に乗り、鉄砲と耶蘇教伝来（ザビエル来日）、信長の時代精神＝当時の国際主義と尊皇思想が近世日本に最初の開国をもたらしたところにある。信長は旧社会の破壊刀、新社会の建設刀とみた蘇峰の織田信長像が最初に登場する。蘇峰の『近世日本国民史』には、その時代の英雄が登場する背景として、その時代を開幕させた物質（道具）と精神が登場する。信長時代は、日本から見れば地球の裏側にある西洋から伝来した鉄砲と耶蘇教である。鉄砲が日本に最初に伝来したのは天文12（1543）年で、上陸地点は種子島で、その7年後に耶蘇教が宣教師ザビエルによって、最初、九州鹿児島に上陸したと紹介している。だがこの程度の歴史記述なら、蘇峰の『近世日本国民史』を紐解くまでもなかろう。蘇峰は最初から他人の受け売りで鉄砲の伝来と耶蘇教の伝来を説明することなく、その時代に生きて、その事件を記録した人々に、その時

代の出来事と思想を語らせたのである。そのドキュメント（文書）はその時代を生きた当人の生の記録である。その一例を挙げれば、鉄砲の伝来については、種子島の領主の記録を採用し耶蘇教の伝来については、ザビエル自身の書簡を中心に、日本見聞記などから実情を語らせている。当時の蘇峰はどのような資料をみずから紐解いて、それを素材に活用したのか？ 信長時代の描写には、織田家の太田牛一の著した『信長公記』⁷⁾等を彼は重宝に活用して、信長の生い立ちから、晩年、京都の本能寺で明智光秀の謀反により自害するまでの思想と行動を再現している（『近世日本国民史』第1巻～第3巻）。

しかも蘇峰の活用した記録と文書は、日本から日本を見たものでなく、そこには国籍を超えた西洋世界と人類の姿が登場する。例えば、スペイン人ザビエルはどのような人物であったのか？

それを説明するために、当時のヨーロッパの新旧の宗教対立から、ザビエルの生い立ちと、長じてヨーロッパの名門大学に入学したころの宗教改革の実情やパリ大学時代のザビエルの生活と、その当時何故にパリ大学でゼスイット（耶蘇会）が誕生したのか？ その詳細をザビエルの関係文書から再現し、とくにザビエルの書簡からザビエル自身の言葉で語らせている。この手法は、今でいえば、オーラル・ヒストリーの手法で、歴史上その時代に実在した英雄及びその人物を取り巻く周辺の人々の証言を積み重ねて描いた立体的なパノラマ画像の手法といえるだろう。

蘇峰によれば、歴史はその時代に生きた当人の口から、しかも国籍を乗り越えた人にも語らせる。これが『近世日本国民史』の特色でもあり、今もなおお色あせない大きな魅力になっている。しかしとりわけ筆者は歴史家蘇峰の魅力がもう一つあったと指摘したい。それは彼が大の尊皇論者であっても、そのライフ・ワークの書名が近世日本天皇史でなく、『近世日本国民史』と命名したことである⁸⁾。蘇峰は誰から見ても天皇崇拜論者で、その歴史論は皇室が中心であった。しかしその眼中には、常に日本の国民が映しだされている。この視点は蘇峰が権力万能の歴史家でなく、ましてや曲学阿世のオポチュニストではなかったことを証明する。歴史家としてみれば、蘇峰はそれまで誰もなしえなかった大業『近世日本国民史』全100冊中の内95冊を第

二次世界大戦が終結するまでに脱稿していた（戦後、5巻を書いて全100冊となる）著者はイデオロギー上の違いを乗り越えて、歴史家として、蘇峰が独力でその資料を蒐集し、全100冊の大作を書きあげたその偉業に敬意を表して、長年勤務した会社を定年退職する前後から、蘇峰の『近世日本国民史』を読み始めたのである。その頃は、筆者の定年退職前で筆者も57歳であった。その年齢は蘇峰が『近世日本国民史』の第1巻に着手した年齢と一致する。

2. 織田信長時代：近世日本の開国は信長から始まる

蘇峰いわく「日本の開国を、嘉永・安政以後の事と思ふは、大なる間違じゃ。日本は足利氏末期に既に開国した。支那との交通頻繁（ひんばん）となった許りではない。我が膨脹（ママ）的動作は、ゆくりなくも、彼の膨脹的動作と満刺加（マラッカ）方面に於て接触し、臙（やが）て西欧の文明は、我が日本を見舞うた。而して此の文明は、物質的には鉄砲を、精神的には耶蘇教を齎した。鉄砲と耶蘇教とは足利末期より、徳川初期に掛けて、我が帝国に最大感化を与へた二大要素じゃ」⁹⁾。

ここで蘇峰はマルコ・ポーロ（1271～1295年）の『東方見聞録』を紹介しポーロの東方見聞録がコロンブスの大航海を引き出しアメリカ大陸を発見させ、そのポーロの著作には日本の屋根瓦が金の瓦で敷かれた「黄金島」と記されて、西洋社会に伝達されたと書いている。信長は、この世界的大航海の変動期（天文期）に尾張名古屋（那古屋）に誕生した。蘇峰は次のように信長を読者に紹介する。

「天文てふ年号は、如何に我が帝国の歴史に、偉大なる印象を留めたるよ。其の3年には、信長が生まれた、その5年には、秀吉が生まれた、その11年には、家康が生まれた。而して葡萄牙人の、日本に来たりたるも、所謂る第一回の日本開国も、同年であった」¹⁰⁾。

蘇峰はこのような世界の動向を舞台に、3人の日本の英雄を登場させる。

2.1 鉄砲伝来について：蘇峰は 1543（天文 12）年説を採用

さらに種子島に鉄砲が葡萄牙人（ポルトガル人）ピントによりもたらされたことについては、種子島に残された当時の記録、南浦文之（ぶんし）の『鉄砲記』（漢文の草稿）と漂流してきたピントの自伝『東洋紀行』を参照して、その鉄砲伝来の年度について次のように紹介している。

「〔鉄砲の種子島伝来の年号は）天文 11 年といひ、或は天文 13 年と云ひ、或は天文 12 年と云ふが、吾人は枯（しばらく）南浦文之の、『鉄砲記』を信賴して天文 12 年、西曆 1543 年として置く。而して家康の出生は、陰曆の天文 11 年 12 月 26 日であるから、これを太陽曆に引き直せば、1543 年 2 月 10 日となる。如何なる計算の仕方でも、鎖国の家元たる、徳川幕府の始祖の出生と開国の紀原と符合するは、不思議と云へば、云へぬことでもあるまい」¹¹⁾。

この種子島は大隅に属する南北凡そ 14 里、東西凡 2 里半の島であった。その離島に鉄砲が伝来したときの様子は南浦文之の『鉄砲記』に漢文で記載されている。蘇峰はその一文を翻訳して、こう紹介している。「西村の小浦に、何処ともなく、一大船がきた。見たこともなき言語不通の、異形の人許（ばか）りぢや。其の中に支那人が居た。そこで西村の地頭が、杖にて砂上に書き、何者乎（なにものぞ）と問うた。支那人は、彼等は遠方の商人ぢや、決して胡亂の者ではない、心配に及ばぬと答へた。そこで島主時堯（ときたか）が彼らを引見した。其の頭目とも云ふ可き三人中の一人が、奇妙な器を所持した。之を試すに効果的面ぢや。時堯は遂に重値を投じて、其の二個を購うた」¹¹⁾。蘇峰は鉄砲が種子島に伝来したシーンを臨場感あふれる描写で、南浦の漢文史料から紹介した。

なお蘇峰はこの鉄砲が国の統一力になったとして、こう書いている。

「鉄砲は日本の天下統一の殊勲者と云うても、過言ではあるまい。源氏は馬を用ひた。平氏は舟を用ひた。織田氏に至りては、鉄砲を用ひた。…中央日本は歩兵であり、歩兵の利器は、槍である。槍よりも更ら

に大なる利器は鉄砲である。極限すれば織田氏の天下は、鉄砲の天下である」¹²⁾。

なお鉄砲について、蘇峰は長篠の戦いで信長の軍団が鉄砲の威力を最善に利用したと指摘し、その戦法では、総計約 5,000 挺の銃の内織田本軍に 3,000 挺配備し、その銃を敵来り迫るに及んで、初めて発射せよと命じ、又 3,000 挺を 1,000 挺づつ逐次発射させるなど、その新戦術で武田軍団に勝利したと強調している¹³⁾。

2.2 耶蘇教の伝来

耶蘇教は我が国に鉄砲の渡来より約 7 年後に伝来した。聖人ザビエルが葡萄牙からインドにて布教を行い、ついでマラッカを経由して、鹿兒島に到着したのが、1549 年、わが天文 18 年 8 月 15 日であった。そこで蘇峰は耶蘇教の伝来が実はヨーロッパの宗教改革の巻き起こした余波であるとして、すでに日本が世界と没交渉の国でなく、東西接触の潮合に関係するものであったとして、西洋の宗教改革の状況を次のように紹介している。

「独逸の田舎僧路錫（ルーテル）が、羅馬法王の權威に対して、反抗の旗を翻して以来、宗教改革の気運は、中欧より、北欧を風靡した。…

この新教勃興の風潮に刺戟せられ、旧教の中心より湧き出でたる運動の one が、乃ち耶蘇会（ゼスイット）の結社ぢや」と書き、「その発起者がロヨラで、其の参加者の主たる一人が、聖・撒美恵（ザビエル）ぢや」と漢字でその名を登場させている。『近世日本国民史』第 1 巻を紐解くと、蘇峰がザビエルをことのほか、高く評価し、その人物とその業績に感動している様子がわかる。その典拠はクラセの『日本西教史』であると思われるが、ザビエルについては、スペインの貴族の出身で、その母の持ち物である、フィリニース連山の麓なる、ザビエル城に生まれたこと、さらにその経歴と来日の案内人が日本人弥次郎で、マラッカに於ける二人の出会いを紹介している¹⁴⁾。

2.3 聖・ザビエルの来歴：その巴里修学期とロヨラとの出会い

蘇峰の筆になるザビエルの紹介は『近世日本国民史』の冒頭を飾るにふさ

わしい物語であると筆者は考える。蘇峰は人物描写が巧みであった。ここでは、紙幅の制約で、全文を紹介できないが、ロヨラとザビエルの関係に触れた箇所からその一節を引用する。

「ロヨラも亦た西班牙の貴族ぢや。彼は壮にして軍に従ひ、砲弾に其脚を劈（つんぎ）かれて跛となった。為めに戎衣を脱して、教門に身を委ねんと心掛けた。彼はエルサレムの聖墓に詣した。彼は種々の困厄を経た。而して学問の已む可からざるを自覚して、三十三歳にして、始めて学に志した。撒美恵が二十二歳にして巴里大学の講師に擢ばれたる当時に、三十七歳の彼は、その学問を完成す可く、同校に赴いた。ロヨラが耶蘇会組織の目論見は、己に以前より胸中に萌（きざ）して居た。彼は其の同志を物色した。而して撒美恵に於て、其の理想的の人物を見出した。好漢、好漢を知る。されど撒美恵は、容易にロヨラの手を箠（はま）らなかつた。而も彼の山をも動かす一念は、遂に撒美恵を動かした。而してロヨラを首魁としての七人組が、巴里に於て出来た。此れが1534年、我が天文3年ぢや。即ち世界の歴史と関係ある、耶蘇会（ゼスイット）の創立は、信長の誕生と同年ぢや」¹⁵⁾。

これは見事な描写である。蘇峰は信長の誕生を世界の動きに重ねて登場させている。「好漢、好漢を知る」は中国の古典にある言葉だが、「山をも動かす」の言葉にどことなく新島襄の精神的影響がみとめられる。

ザビエルの航海はマラッカから海賊船に乗り込み、弥次郎とその僕2名の日本人と宣教師らと共に1549年8月15日、鹿児島に上陸した。その航海は言語に絶する苦難の連続であった。ザビエルの日本伝道は合計27か月に及んでいる。その間の行動を蘇峰は見事に描写しているが、各種のザビエル伝に紹介されている他、蘇峰の描写についてはとくに『近世日本国民史』第1巻のp.92～111を参照されたい。

蘇峰の最大の関心事は、信長の時代を描く背景として、鉄砲と耶蘇教の伝来を描かなければ、その時代が生み出した信長と日本の情勢を描けないと実感したからであろう。

2.4 信長時代の尾張名古屋（一代の英雄の誕生地）と信長の特徴

歴史家蘇峰の信長像は他の歴史家が描いた英雄信長像とは趣がことなっている。蘇峰がその筆で英雄、人物群像を登場させる手法は、その時代と土地からクローズ・アップさせる手法である。彼は戦乱の信長時代について、こう語っている。

いよいよ「日本全国に群雄割拠の形勢を来たし、世の中は自動的に、統一の傾向を生じた。但だ此の傾向を促進して、各個の小丸を打て、一大丸となすは、英雄漢の事業ぢや。舞台は開いた、役者は誰乎。第一幕は、信長ぢや」¹⁶⁾と紹介する。しかも時代は信長が製造した時期でない。この乗ずべき時期は群雄に対して一切平等であった。毛利元就（もとより）北條氏康、上杉謙信、武田信玄、今川義元らも皆んな同一、ただこれに乗り得たのは、信長のみ。「その故は何ぞ」と読者に問いかけている。

以下、ここでは、信長の誕生地とその指導者としての特色と当時の対外関係についての記述を紹介する。

(1) 信長が地の利を得たことについて。

信長が得た「地の利とは尾張が京都に近からず、遠からず、恰も適當の距離を保ったからだ」¹⁶⁾なぜなら、英雄が天下に号令するには、民心を安心せしめる土地でなければならぬとみて、毛利や北条は「一方に雄長たるには余りあるの勢力ぢやが、旗を京都に立て、天下に号令するには、甚だ飛び離れて、二階から目薬の嫌いがある」。特に越後の謙信や甲斐の武田も、その地の利が京都からは遠く進まんとすれば、背後を襲われ、後を顧れば、前を塞がれる。単騎長駆、とても思ふ様にならなかった」。

これに反して信長の尾張は、木曾川の沖積層（ちゅうせきそう）で、豊沃の地であり木曾川が流れる南東の一带からみて、蘇峰は次のように分析する。「（その一带）は一望平野で、美田豊饒ぢや。東方參河に接したる地、及び知多半島、何れも岡陵（こうりょう）で、其の一州中、三百米突（メートル）以上の山は無い。信長が此処より起ったのは、良（まこ）とに仕合と云はねばならぬ。如何なる原始的戦争でも、無代価ではできぬ。若し商売とす

れば、戦争は最も資本を要する商売ぢや。まして戦争が漸く節制的となり、大部隊の駆け引きを事とし、長槍・火（縄）銃の使用せらるゝの時に於いては、人と貨とは戦争に必需の要素ぢや。然るに尾張は人庶（おおく）、家富む。信長の覇業の基は、確かに此より成る」¹⁷⁾。

蘇峰は將軍でもなく、一介の歴史家であった。しかし尾張名古屋の地の利の説明は一流の軍学者のように兵用地誌の理解も正確である。さらに戦争には資本が必要で、その点でも尾張は人と物、富にめぐまれた土地柄である特色を突いている。

(2) 少壯の信長：旧社会の破壊刀、新社会の建設刀を手中にする。

蘇峰の描く人物像はまた、蘇峰流の筆の冴えを見せてくれる。彼は少壯の信長を次のように描写している。

「蛇は一寸にして、人を飲む気象がある。信長も生まれながらに、人を人臭しと思はぬ。面魂（つらだましい）を具へて居た。彼は手に終えぬ大腕白者ぢや、彼は飛び切の大我儘ものぢや。傍若無人（ほうじゃくぶじん）は、彼が一生を終始しての振舞いぢや。…」¹³⁾しかし信長には、つねに他人が諒解しがたい目的があった。それは室町時代に京で流行した虚礼虚文で、「誰がこれを打破するか？ 信長ぢや」と蘇峰は指摘した。時は信長が16歳の時、その父信秀の葬儀における信長の行動も世間を騒がした。信長は腰に袴もしめず、脇差を三五縄（しめなわ）で巻いて仏前に出て、抹香を手でつかんで仏前に投げつけたのである。通常ならこの行いは言語道断であるが、蘇峰は織田家の太田牛一の『信長公記』を典拠にして、少壯の信長は遊びに耽ることもなく、朝夕馬の稽古に励み、3月から9月までは川にはいつて水練の稽古をし、弓の稽古と鉄砲と鷹狩りに興じた姿を描いている。そして蘇峰は信長が旧社会の破壊刀で、彼自らが新社会の建設力として天下の機運に乗じた¹⁸⁾と論じている。

蘇峰は信長を描くに際して、どの文献を重宝したのか？

とかく英雄には、様々な小説・伝記が残されているが、蘇峰は太田牛一の描いた『信長公記』を信頼し重宝して活用している。もちろん蘇峰は歴史家頼山陽や新井白石の資料からも信長とその時代を観察しているが、一番信

頼したのは太田牛一の『信長公記』であった。その一例として、蘇峰が描いた桶狭間での信長と今川義元との戦いを紹介してみよう。

蘇峰は桶狭間の役が室町時代の旧要素と、安土桃山時代の新要素との衝突とみた。その役は永禄3年5月1日であった。今川が駿、遠、参の諸武将に触れをだし18日にはその本営を沓掛に進め、19日の大攻撃の一般方略を定めた。当初は今川軍約25,000人の向かうところ敵なしの有様で、連戦連勝であったが、これを迎え撃つ織田軍は劣勢で、清州城で開いた軍評定の際も野戦では勝利の見込みなしとみて衆人が籠城を主張した。しかし信長は19日の未明、早くも敵が鷺津と丸根山の陣地に押し寄せたとの注進を受けたとき、一人信長は清州城内で敦盛の舞を演じ「人間五十年化天（げてん）の内をくらぶれば、夢幻の如くなり。一度生を得て、滅せぬ者の有るべきかとて」蝶（ほら）ふけ具足よこせと命じて、御物具を身に着け、立ちながら食事を取り出陣した姿を太田牛一が『信長公記』¹⁹⁾に記録している。蘇峰はその場面を、講談や小説とは区別し、『近世日本国民史』に「信長の覚悟」²⁰⁾と題して、紹介している。

この後、清州城から飛び出した信長は主従六騎で、途中しばしば馬を輪駈（わがけ）して、士卒の到着を待ち、熱田神宮に到着してもなおその数は三百余人であったという。だがこの戦は今川の貴族的文弱趣味と信長の平民的武強趣味の衝突で、信長は豪雨のなかを奇襲戦法で今川の本陣を突きその敵の油断に乗じて勝利したのである、と信長の勇氣と奇襲戦法に注目した。

最後に蘇峰はこの戦の総勘定として、この戦いは織田氏対今川氏の戦いでなく織田氏対天下の大取引であり、「信長を日本全国に広告する、一大引き札」となり、遂には「此の不釣り合いの敵との戦勝により正親町（おおぎまち）天皇の内旨を拝し、続て將軍義昭の依頼に応じ（信長が）京都の大舞台に乗り込む素地を作りたる唯、この一戦に由る」²¹⁾と総括したのである。

この桶狭間の役の永禄3（1560）年は、信長27歳、信長に味方した家康は19歳、秀吉は25歳、まだ織田家の陣笠にすぎなかった。翌永禄4年は後に本能寺で信長が討ち死にするまで、残すところ22年であった。その間、信長は日光で、家康は月光であった。信長の中原への進出は尾張を根拠地として、那古屋（なごや）より清州、清州より小牧山、小牧山より岐阜、岐阜

より安土へと前進することになる。問題は信長が何故に、その居城の建築を京の都でなく琵琶湖を西に望む安土に移そうと決意したのかである。

(3) 信長の安土城：なぜ、京、大阪（前近代では「坂」だが、蘇峰の原文通り全て「阪」に統一）でなく、安土なのか？——その戦略的な意図

これまで信長は蚕殻の標本のような印象を広く世間一般に与えていたが、蘇峰は信長が経済や文化にも造詣が深く、その教養と趣味も好尚で、多角的、多方面の文明政治家であったとみていた。しかも信長の安土城築城の意図については、『近世日本国民史』第2巻で、その戦略的な意義を説明するために、その城郭の構造についても、詳しく説明している。蘇峰は信長の城郭の移転がその進取の気性が原因で、信長には広く天下経略の志があり、その地歩を進める度にその策源地を移動する必要を認めたからという。それなら、信長は何故に京都に城を構えなかったのか？である。蘇峰はこれに答えて、次のように説明している。

「此れには安土を必要とした理由と、京都を不可とした理由とがある。安土を必要とした理由の一は、上杉氏を抑ふる為ぢや。信長の畏る可き对手は、信玄死後は、謙信と云はねばなるまい。謙信の入京の捷道（ちかみち）は、越後より越中・加賀を経て、越前より江州に出るにあり。信長が柴田勝家を越前北庄（きたのしょう）に置きたる理由は、直に信長の安土に城（きづ）きて、自から之に居る理由の一部分を、説明することが出来る」²²⁾。

この説明は蘇峰の戦略眼の鋭さを見事に証明するものであろう。では何故に信長は秀吉のように大阪に城を移さなかったのか？これについて蘇峰はまた次のように説明している。

「彼は蚕（つと）に大阪の形勝の地たるを認め、その故に本願寺と、葛藤の端を發（ひら）いた。此れは他日中国、西国経営の策源地として、之を占有せんが為であった。併し京都には、左程の重きを措かなか

った。彼は京都とは恒に接触を保った。又た出来得る限りに於て、屢々入京した。されど京都が、彼の天下布武の本拠として、餘りに消極的地勢であり、且つ彼の信長流たる、独自一己を發揮するに、餘りに歴史に富み、殊に室町幕府の古巢であれば、新時代を開始し、新社会を開拓する彼に取りては、一步退いて安土に居る乎、一步進んで大阪に居る乎と考へたであろう。大阪は時機未だ熟せぬ。望んでも当分は克（あた）はぬ。左すれば問題は、京都と安土だ。彼は初て義昭を奉じて、入京した際さへも、兵を東山に留めて、洛中には入れなかった。京都の布武的策源地でない事は炯眼（けいがん）なる彼には百も承知であった²²⁾。

これは蘇峰が戦国の京都の歴史にも大阪の歴史にもよく精通していたから、この分析が可能であったことになろう。信長は古都京都の雅の世界に呑まれなかったのである。大阪がまだ時期尚早なら、一步退いて、安土に城を構える、これが信長の戦略だったことを蘇峰がその炯眼でみぬいたのである。

信長の安土城築城は戦国時代の一大ページントであった。この時、信長42歳。安土に転進するため家督を息子の信忠に譲り、手持ちの財を安土城の築城に投入した。これは信長の畢生の目的たる天下統一の為であった。この安土城一帯は山上に7層の天守閣が聳えたつ豪壮な城郭であった。その内部構造については、織田家の太田牛一が『信長公記』に活写している。その構造は天守閣内部の壁画とイタリアの耶蘇教会風の空洞に特色があった。7階の座敷は周囲が金張りで、四方の内柱には、上（のほり）龍、下龍、天井には天人御影向之所、御座敷の内には、三皇、五帝、孔門十哲、商山四皓（しこう）、七賢等が描かれていると『信長公記』が記録している。信長は安土に君臨しながら、その後は、機会を見つけて、京都朝廷との関係を密にしたのである。

その一例をあげれば、馬好きの信長が最初は安土構の北・松原町の西海端に馬場を構え、信長が黒い南蛮笠をめし、虎皮の靴を履き、蘆毛の軍馬にまたがり、はやうまかけをしたすがたを「のぶながおおやけき」がきろくして

いる。また天正9年2月28日には、五畿内隣国の大名小名、御家人を召し寄せ、聖主（天皇）の叡覧に供するための馬揃（大観兵式）を京都で挙げた。

蘇峰はこの信長の馬揃に注目し、その儀式の有様を讃えて、「日本全国の中樞が何処に存するかを実物標本として天下に示し、世界に示した」²³⁾、それには外人宣教師もその盛儀をみて驚嘆し、群衆は天下安泰を喜び、天子の御叡覧に群衆も千秋万歳であつた有様を紹介している。或る時は、信長が馬上で演技し、場中剣を揮い槍を取り、的に命中すると、衆人がこれに喝才し、その声天地を動かす許りで、会場には13万人が詰めかけた、という²⁴⁾。

(4) 信長と耶蘇教と外人宣教師との関係

安土に城を移した信長は、宗教について、どのような政策を採用したのか、信長は敵対する宗教に対しては、比叡山の焼き討ちなど、無慈悲で徹底した行動に出たことで、無神論者であったと、見られていたが、信長は岐阜城でも耶蘇教に興味をしめし、安土では、城の周辺に城下町をつくり、全国から自由に商人や職人を呼び寄せ市場を開いて、その城下に耶蘇教の宣教師を定住させた。その信長の行動について、蘇峰はこう評価している。彼が安土に耶蘇教宣教師を呼び寄せたのは、宗教的寛容さのあらわれであった。本来、無神論者で、耶蘇教を信仰しない信長が何故に安土で、耶蘇教宣教師と意気投合したのか？

この点についても、蘇峰は次のように説明している。

「耶蘇教は、信長に於いて、偉大なる保護者を見出した。彼は何故に…耶蘇教を信仰したる乎。曰く否。耶蘇教の国利民福たるを、識認したる乎、曰く否。然らば何故に彼は、耶蘇教の保護者と為った乎。信長は陽に聖教を信じたる如しと雖も、其の実は之を信ぜず、又た信ぜんとするの希望を持たなかつた。そは聖教の眞実は、彼の欲望に適せぬからである（日本西教史）とは、当時宣教師らの見る所であつた。又信長は其性残酷、傲慢であつたが、神は彼を以て、聖教の外護者となさしめ給う

た（日本西教史）とは彼らの感想であった。乃（すなわち）ち信長彼自身が、信仰心なきのみならず、宣教師等も、毛頭此の傾向を信長に認め得なかった」²⁵⁾。

この判断は蘇峰の鋭い直観であろう。

蘇峰は信長と宣教師の意気投合が双方の互いに胸に一物ありての事と見抜いて、「宣教師は、信長の力を藉（か）りて、耶蘇教を拡張せんとし、信長は宣教師、及び耶蘇教を利用して、其の天下統一の業に資せんとしたからに他ならぬ。手短く云へば、互いに利用したのであった」と指摘した²⁶⁾。こうした蘇峰の信長観は信長の腹の内を見透かしたその心眼による指摘であろう。しかし蘇峰は安土時代の信長と宣教師の関係については、さらに突っ込んだ問答を紹介している。とくに信長は宣教師のなかでもオルガンチノとフローエーとワリニヤーニと長時間の問答をしている。彼らは安土で信長から懇切をもって迎えられ、ある日、地球儀を前に、信長から来朝の航路を示さんことを求められたとき、宣教師は信長が次のように発言したという。

「此の如き長途を経、此の如き大胆なる業を取てする者は、尋常人では出来ぬ。而して微笑しつゝ、師父等を顧みて云うた。卿自ら大胆不敵にも、這般の危険を冒す。卿は悪謀を企む大泥棒でなければ、必ず卿の齎らす福音は、真正善美な法教であろうと」²⁷⁾蘇峰は信長のこの発言について「信長は宣教師を利用したばかりでなく、彼らの冒険、敢為（かんい）犠牲の精神に共鳴した。若し彼（信長）に世界的雄心を鼓吹したものとすれば、恐らくは宣教師の言論よりも、宣教師其物であったろう」²⁸⁾英雄英雄の心を知るとは、このことであろう。

(5) 信長は平民主義の実行者兼対外膨張論者であった

蘇峰は信長を評して、彼が平民主義の実行者であり、同時に帝国主義的発想の持主であったことにも言及した。勿論、信長時代の日本人が平民主義を理解していたと云う意味ではなかった。しかし現実において、門閥はすでに崩壊し格式も廃止され、社会は総じて実力あるものが重用され、その手腕を發揮した。信長は来日したワリニヤーニからキリシタン国の黒奴を献上され

たときも、「彼男健やかに器量成り。爾も強力十三人に勝たり」とみて、その従者に取り立てていると、太田牛一が指摘している²⁹⁾。これは信長が人材を採用する際にも、実力を重んじて、それ以外の何等の価値をも認めなかったからである。信長は乞食であれ、巡礼であれ、草履取理であれ、役に立つものなら、その役に立つに相応しいだけの位置を与えた。それは秀吉の伝記『太閤記』の作者小瀬甫庵もその作品で特筆した通りであった。蘇峰はまた信長の平民主義のあらわれとして、彼の晩年、つまり京都本能寺の変の年の正月の礼式に大名、小名を問わず、一切の参観者に向かって禮錢百文づつの平等課を持参すれば、年賀の儀式に参加する資格が与えられたことに注目した。

この年賀式は天正10年正月朔日、安土城で行われ、夥しい数の群衆が参加して、賑わいをみせ、そのために石垣が崩れ、負傷者や死人が出たと太田牛一が『信長公記』に書いている。その日は、他国衆も安土衆も山上に続く各階段を（多分大手門から大手道の急な石段）を登り、本丸の御座敷に案内され、…信長が天皇の行幸を願う際にと拵えた御幸之間を拝見することができた。その部屋は「殿中悉（ことごとく）く総金」で…光輝き、衣香が周辺に薫じて御結構な雰囲気であつたと、太田牛一が書き写している（『信長公記』）。この年賀式はいかにもハイカラ好みの信長らしい式典であった。蘇峰は信長のこの行為に注目して、それが一切の階級を無視したやり方であったとして、こう指摘した。「（この儀式の）十疋（びき）均一の禮錢の如きは、唯だ其の特徴を証明する適例だ。彼は只だ其の人の能力と、効果とを見て、其の人の何者であるかには頓著せなかった。されば彼は苟（いやしく）も一芸一能ある者には、…その顔を覚え、機会ある毎に言葉を交はし、声を掛けた。彼は平民主義の理想家ではなかったが、平民主義の実行者であった」³⁰⁾。蘇峰は信長の平民的な性格をよく理解していた、といえる。

一方、蘇峰は信長の対外膨脹、つまり無意識ながらも帝国主義的な意識の持主であることも見逃さなかった。信長の時代は大航海時代の始まりで、世界が狭くなり、外国からも交流を求めて宣教師らが日本にやってきたし、日本からも外に向かって押し出した。蘇峰はその時代的な雰囲気の中で、信長が朝鮮に元龜元年にまず使節を送り、朝鮮を介して明国に交通を求めたので

あろうと推測した。また宣教師フロエーの「年報書」にも、ゼスイットの宣教師らは「信長が毛利を征伐し、九州を征伐し、日本を統一して、而して後大艦隊を率いて、支那を征伐するの志であった」とあり、蘇峰は当時の宣教師がある意味では、信長の外事顧問であったとすれば、その機微を漏らした相手が宣教師ではなかったのか、と推測した³¹⁾。

安土時代の信長の思想と行動は、こうして織田家の太田牛一やフロエーら外人宣教師の記録（本国向けの「年報書」や書簡と信長との問答など）に記録されていて、これら 16 世紀の内外の同時代人が書き残した史料からも蘇峰は約 300 年の時空を超えてその時代をリアルに再現している。

3. 豊臣秀吉時代：何故に朝鮮、明国征服を目指したか？

3.1 「秀吉は人間学の大博士」：しかも大欠陥の保持者

蘇峰はまず『近世日本国民史』豊臣時代甲篇の冒頭で桃山時代の秀吉の人物像について、次のような特徴をあげている³²⁾。

「桃山時代は、安土時代の継続である、延長である、発展である。さ
れど両時代は、薄紙一重に接近して居ないから、その特色は、格別であ
る。否、前者を冬とすれば、後者は春である」。

「一口に桃山時代と云へば、長き様であるが、其の実は 20 年足らずの
歲月だ。秀吉の快馬長鞭、一挙して（明智）光秀を退治したる、山崎合
戦より、その阿弥陀峰に、未死の魂を塵（うづ）める迄、足掛け 17 年
だ。それに家康の覇業を定めたる、関ヶ原役迄を、通算するも、足掛け
19 年のみ。然るに此の間に於て秀吉は殆ど空前絶後の大事功を、成就
（じょうじゅ）した。そは申す迄もなく、日本全国を統一した事ぢや。
然もその統一は、名義上のみならず、實際的であった。…天下の大経綸
に於ては、秀吉は信長の高足門人といふ丈（だけ）ぢや。併し其の大経
綸を実行するの手腕、能力に至りては、信長以上ぢや。信長は人を見る
の明に於ても、人を用ふるの術に於ても、決して第二と下らぬ英雄であ

った。秀吉は、古今に比類なき人間学の大博士であった。信長は敵を退治するの道に通じた。秀吉は、敵を味方とするの道を解した。信長は人を畏服せしめた。秀吉は人を悦復せしめた。如何なる悪党でも、如何なる君子でも、如何なる策士でも、智者でも。一たび秀吉に接触すれば、何れも催眠術に罹ったも、同様であった。秀吉の下で働くことは、総ての人の義務でなく、寧ろその愉快であった」³²⁾。

3.2 信長と秀吉：その人亡ぶれば、その政亡ぶ

蘇峰は一代の英雄信長と秀吉をこのように対比したのである。しかし天正10年6月2日、明智光秀の謀反による本能寺での信長の死は、驚天動地であっただけでなく、その弟子秀吉の運命にも影響した。以下に『近世日本国民史』「豊臣氏時代」甲篇の冒頭の一節から、当時の蘇峰の意気込みをまず紹介する。

「大正八年一月一日、初日の出に向かって、本文を書き始む。吾人が今茲に、豊臣氏時代と称するは、天正十年六月、信長本能寺遭難以来、慶長三年八月、秀吉が伏見城にて病死する迄、足掛け十七年間の事である。即ち秀吉四十七歳より、六十三歳迄の事である」そして信長死後のこの時代が当面は秀吉によって日本の平民主義が開花した時代とみてこう語っている³³⁾。「我が日本の平民主義は、秀吉によりて、最も大なる凱歌を奏した。…秀吉は信長よりも、特に家康よりも、最も芝居気が多かった。彼は一種の大役者であった。…吾人は秀吉を大役者と云ふ、決して大仮装者とは云はぬ。秀吉は大仮装者となるには、餘りに其の心腸が多かった。切言すれば、秀吉の全身の一半は、心腸であった。彼の此の心腸には、奸雄も、猛将も、美人も、才子も、その他苟（いやし）くも彼と接触する者は、悉く皆な彼に致された。彼が微賤より起こりて、日本統一の業を成就（じょうじゅ）したのは、要するに総ての人をして、彼に愛着するを禁ずる能はざらしめたる、此の心腸の力であった。而して彼の遺業が、彼と興に亡びたのも、亦た恐らくは、此れが為めであろう。所謂る其人亡ぶれば、其政亡ぶとの適例は、彼に於いて之をみる」³⁴⁾。これは秀吉の性格と心中を知る蘇峰の名言である。しかし蘇峰は秀吉に好意を寄せても、やはり中庸の歴史家であった。秀吉の生涯、とくに

信長死後の秀吉の思想的変化を客観的に考察して、晩年の秀吉には大きな欠陥があったことを指摘した。その一つが秀吉の誇大妄想による文禄・慶長の役であった。蘇峰は秀吉の朝鮮の役を執筆するために、自ら朝鮮に出張し、ソウルに住居を移して、秀吉の朝鮮遠征の史料を蒐集し、朝鮮と明国側の記録からも秀吉の朝鮮征伐の神髓に迫ろうとし、その努力によって、朝鮮と明国の確かな史料からも朝鮮の役の歴史を考察したのである。その著作は『近世日本国民史』「豊臣氏時代」の「朝鮮の役」全3巻で、その本文の総ページ数は2,220ページである。

3.3 大阪城築城後：絶頂期の秀吉 宣教師に大陸征服を漏らす

秀吉が山崎の合戦で、明智を倒し、信長の将校としての身分から一年後には完全に信長の相続者となり、天正11（1583）年5月には、大阪城の築城を開始—そのころの天下人としての秀吉について、蘇峰は宣教師フロエーやコエルボらとの談話を紹介している。特にフロエーは、一時期、大阪（？）に居住して、大阪城築城の規模と工事の状況を次のように書き残している。

「1583年—秀吉は、至尊及び諸門跡に、大阪移居を請うた。而して此の歳より、約3万人を、日となく、夜となく大阪城の築城に使用し、其の成就（じょうじゆ）迄には、3年以上を費し、其の人も倍加して、6万人を使用した」 「城壁は悉く石で、実に高大であった。特に驚く可きは、石なき大阪に、何処より斯く迄、大小各種の石を、運搬し得たかであった」と³⁵⁾。また蘇峰は秀吉が天正14年に大阪城で謁見したコエルボ（ゼスイットの支部長）に向かい支那征服の機密を漏らしたときのその談話を次のように引用している。「予が日本全国を平定するの日は近きにあり。此の上は土地も、富も望む所でない、唯だ赫々（かくかく）たる威名を萬古に伝ふるの一事のみぢや。是が為めに、日本の国務に秩序を注入し、一切を鞏固の基礎に措（お）き、之を弟秀長に委託し、親から進んで朝鮮、支那の征服に従事する筈ぢや。今や大兵輸送の為めに、戦艦2,000隻を造る可く、樹木伐採の命を布かんとする所である。予は師父等に、何等の注文なし、但だ彼らの力によりて、葡萄牙より二個の巨大にして、武装したる船を獲来る丈の事のみだ。予は潤沢（じゅんたく）に其の代価を払ひ、且つ船員等にも、最高の給料を与

ふ可し。縦令（たとい）予は中途にて斃るゝも、豪も遺憾がない・・・」³⁶⁾。
(なお蘇峰はクラセの「日本西教史」などの記事と比較し、この場面を再現しているが、その説明は本誌の紙幅の制約により削除したため、巻末に参考文献追加として追記する。)

3.4 秀吉の軍事パレード：京都御所から天皇の錦の御旗をかざして出陣

蘇峰は『近世日本国民史』「朝鮮の役」上巻で秀吉の外征の準備と決定から、外征の根本理由についても明確に説明にしている。まず、外征の準備は天正19年8月以降、急転直下を実施され、翌年3月1日には、秀吉が自ら唐（明国）に出陣を決めて、名護屋御座所（名護屋城）の普請を黒田長政、小西行長、加藤清正に命じた（天正19年8月23日）。次いで秀吉の京都御所からの出陣は天正20（1592）年3月26日であった。その場面は秀吉一世一代の大芝居であった。蘇峰は秀吉が後陽成天皇の観覧を仰いで、御所から出陣する風景を「豊鑑」の記録を参考に描写している。それによると、26日、秀吉は早天に入朝し、出征の旨を上奏した。「…秀吉は天皇出御の棧敷の下に到り、馬より下りて歩進し、階（きざはし）に昇りて拝謁した」とある³⁷⁾。これは明らかに天皇の軍隊の出陣であった。蘇峰は秀吉が「其の出陣振りを、京中の者共に見物せしめんが為めに、故（ことさら）に京都を出発点としたのであろう」³⁷⁾と推測している。このとき、秀吉は敵を知らず、己を知らず、誇大妄想癖に感染していた。秀吉の配下の軍勢は総勢30万人で、秀吉は野心満々であった。

おわりに

16世紀の世界史は大航海時代であった。その視点から蘇峰は、信長が開国派の先駆者であったとして、信長時代の日本と後の徳川時代の日本を対比し、次のように総括した。

「(信長時代は)日本即ち世界で、世界即ち日本と云ふ様な、狭き了見は、全く(後年の)徳川時代の産物だ。この時代(16世紀)の思想に囚われた

者は、小き谷川を隔て、も、なお隣国の感をなし、日本以外の地に向ふは地獄に向て旅行する様に思ひ做したが、元亀・天正時代に於ては、支那も、朝鮮も、暹羅（シヤム）も呂宋（ルソン）も、南蛮も、乃至羅馬も、西班牙も、葡萄牙も決して別世界の感をなしては居なかった。

彼等は未だ必ずしも天涯比隣、四海一家の思をして居なかったであろうが、さりとて決して日本と世界とを、隔離しては見て居らなかった。別言すれば、日本と世界との距離を、極めて接近して考へて居た。蓋し元亀・天正時代は、日本が漸く世界化せんとする時代であった。これと同時に、或る程度迄は、又た世界を日本化せんとする時代であった。此の新傾向を頓挫せしめたのは、文禄慶長の役－豊太閤朝鮮征伐－の失敗である。而て更に、より多く頓挫せしめたのは徳川氏の鎖国政策である。此の政策が、日本国民の利害得失は、姑く別問題とするも、日本国民の思想より、世界的観念を奪ひ去りたることは、明白な損失であった³⁸⁾。もしも、信長が本能寺で明智光秀の謀反により、自決することがなかったとしたら、その世界認識をおもも発展させて、持続できたのではなからうか。

秀吉時代のまとめとして、秀吉の海外征服欲の淵源：なぜ明国を選んだのか？この秀吉の海外征服欲、特に、明国征服の意欲は何処から、発生したのか？蘇峰は『近世日本国民史』「朝鮮の役」で、次の二つの理由を挙げている。前者について「そは一は時代的に、他は個人的に観察すべきものと思ふ。時代的とは、当時の日本は、足利氏乱世の余を承け、東西接触の期に際し、人の壮志を鼓舞して、自から海外に雄飛、発展する禁ずる能はざらしめたる、機運があったことだ。個人的とは、秀吉其人が八個年に日本を統一し、天下の事は、何を為しても、殆ど意の如くならざるはなきを見て、当人自から頗る乗気となりたる事だ。即ち当初は、人酒を飲み、後には酒人を飲むと云ふ諺の如く、秀吉も頓々拍子に、一大成金となり済まし、此上は先から先へと、騎虎の勢ひに乗じて、遂ひに底止する所を知らなかったのだ」³⁹⁾「酔客の腹は、下戸には判知らぬ」。

今一つ、秀吉は何故にとくに明（中国）に向かって、その征服欲を充たそうとしたのか？蘇峰はそれには多少の理由があるとして、こう述べた。「日本は開国以来、支那を以て、海外に於ける対象国とした。聖徳太子の日

出處天子書（ひいずるところのてんししょ）を日没處天子に致すと、隋の天子に書を興へ給ひし以来。平安朝、鎌倉時代より文永、弘安の役を経て、足利氏の世を没する迄、外国とさへ云へば、まづ支那であった。遣唐使は勿論、留学生や、僧侶の往復や、貿易船の交通や、何れも皆然りであった。朝鮮は数ふるに足らず、天竺は餘りに遠きに過ぎた。此中に於て支那のみは、文化の中心、富盛の淵藪（えんそう）として、我が日本の恒に憧憬し、羨仰（せんこう）する所であった」「されば雄心落々たる秀吉が、海外に手を出さざれば止む、苟（いやしく）も出すからには支那を目指すは当然ではない乎。更らに秀吉をして支那に向はしめんとしたる所以の一は、支那が古より日本に関係あるから許りでなく其の大国にして、文化国たる許りでなく、当時で云へば、三国一の富国たる許りでなく、亦其の積弱の国であるとを、覷定（しよてい）した為めであろう。即ち一言にして云へば、支那は秀吉の征服欲を飽かしむるに、あらゆる条件を具備したが為めであろう。国富んで抵抗力少しとせば、何れの世、何れの時にても他の侵略の目標となるは、当然だ。必然だ」⁴⁰⁾。

歴史、人を造り、その人がまた歴史を造る。それならば人（国民を含めて）その意識の変革がなければ、将来も戦争の歴史は永久に繰り返されるに違いない。第二、第三の秀吉は、誕生するだろう。そうならないように自覚する国民が誕生する国のみが争の悲劇を防止できる。

16世紀の蘇峰の総括から、さらに幅広く視点を拡大して信長、秀吉、家康の思想と行動を比較検討する価値があると思われる。

世界中どこでもいつの時代でも、政治家が手に入れた権力は年月と共に腐敗し易い。蘇峰の目は鋭くその一面を突いている。

参考文献及び注

- 1) 『史記』：中国古代の歴史家司馬遷については、多くの研究書があるが手ごろな解説書としては、宮崎市定著『史記を語る』岩波新書 86 がある。
- 2) 『ローマ帝国興亡史』：エドワード・ギボンの古典的名著。この著作は 1773 年～1788 の間に、全 6 巻が刊行された。なお手ごろな、解説書には、ロイ・ポーター著『ギボン 歴史を創る』中野好行他訳、法政大学出版局 1955 年刊行がある。

- 3) 徳富蘇峰著『近世日本国民史』全100巻中、本稿では最初の第4巻～第10巻は民友社版を参考に引用する。
- 4) 『蘇峰自伝』昭和10年9月中央公論社〈限定版〉
- 5) 早川喜代次著『徳富蘇峰』p.15、昭和43年12月、徳富蘇峰伝記編纂会及び「蘇峰自伝」p.87、昭和10年9月中央公論
- 6) 藤谷みさを筆記「国民史をめぐる憶い出」『新島研究』No.16、収録、同志社新島研究会。昭和33年5月。
- 7) 『信長公記』は織田家の祐筆太田牛一が書いた信長の伝記。蘇峰はこの第一次資料を活用して、織田信長の思想と行動を『近世日本国民史』第1～3巻で再現した。
- 8) 蘇峰著『大事小事』昭和7年、民友社刊行。蘇峰はこの著作で、『近世日本国民史』の書名の由来を「国民史を書きたいから」と述べ「国民全体の運動、生活思想を総括して、その消長、隆替、興廢、盛衰」を描きたいと語っている（pp.343～344）。
- 9) 徳富蘇峰著『近世日本国民史』第1巻、織田氏時代前篇、p.67。
- 10) 同上、同上、第1巻、同上、p.73。
- 11) 同上、同上、第1巻、同上、p.75, 76。
- 12) 同上、同上、第1巻、同上、p.87。
- 13) 同上、同上、第2巻、織田氏時代中編、p.92, 94。
- 14) 同上、同上、第1巻、織田氏時代前編、p.89～111。
- 15) 同上、同上、第1巻、同上、p.90, 91。
- 16) 同上、同上、第1巻、同上、p.112。
- 17) 同上、同上、第1巻、同上、p.113。
- 18) 同上、同上、第1巻、同上、p.122～125。
- 19) 太田牛一著『信長公記』桑田忠親校注、新人物往来社、昭和50年刊行、p.54。
- 20) 徳富蘇峰著『近世日本国民史』第1巻、織田氏時代前編、p.155。
- 21) 同上、同上、第1巻、同上、p.161。
- 22) 同上、同上、第2巻、織田氏時代中篇、p.122, 123。
- 23) 同上、同上、第2巻、同上、p.122。
- 24) 同上、同上、第3巻、織田氏時代後編、p.91, 95。
- 25) 同上、同上、第2巻、同上、p.216。
- 26) 同上、同上、第2巻、織田氏時代中編、p.216, 217。
- 27) 同上、同上、第2巻、同上、p.240。
- 28) 同上、同上、第2巻、同上、p.240, 241。

- 29) 同上、同上、第2巻、同上、p.245。
- 30) 徳富蘇峰『近世日本国民史』第3巻、織田氏時代後篇、p.407, 408。
- 31) 同上、同上、第3巻、同上、p.410～411。
- 32) 同上、同上、第4巻、豊臣氏時代甲篇、p.1～4。
- 33) 同上、同上、第4巻、同上、p.1。
- 34) 同上、同上、第4巻、同上、p.4～5。
- 35) 同上、同上、第4巻、同上、p.255～256。
- 36) 同上、同上、第7巻、豊臣氏時代乙篇、p.353～354。
- 37) 同上、同上、第7巻、同上、p.335。
- 38) 同上、同上、第7巻、同上、p.412。
- 39) 同上、同上、第7巻、同上、p.139～140。
- 40) 同上、同上、第7巻、同上、p.142～143。

参考文献追加

- 1) ジアン・クラセ『日本西教史』上巻、大政官翻訳、大正2年12月、時事彙存社
翻刻発行、国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/824973/27>
- 2) ジアン・クラセ『日本西教史』下巻、同上、大正3年5月、同上、国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/943461/11>
- 3) ルイス・フロイス（松田毅一・川崎桃太訳）『日本史』1・2、中央公論社。
- 4) ルイス・フロイス『日本史』信長とその時代、同上。
- 5) 小瀬甫庵（河野純徳訳）『太閤記』桑田忠親校訂（上・下）岩波文庫。
- 6) 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』平凡社東洋文庫、1994年。